

風知草

特別編集委員 山田孝男

「元慰安婦に対する名誉毀損を問われた『帝国の慰安婦』の著者、朴裕河・世宗大名誉教授(66)が、韓国最高裁の判決で無罪確定となった(10月26日)。

北朝鮮)の女性たち。その実像を博引旁証で伝え、左右両翼の、思い込みに基づく不毛な論争に異を唱えた警世の書である。

1910(明治43)年から45(昭和20)年まで、朝鮮は大日本帝国の植民地だった。帝国解体から45年が過ぎた90年以降、朝鮮人の慰安婦は「日本軍が強制連行した人権奴隷」だった」という主張がシャーンナリズムを席巻した。

「性奴隷」否定に猛反発したが「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」(旧・韓国挺身隊問題対策協議会)の中心、尹美香だった。「日本を免罪し、日本の右翼を喜ばせる本」だと批判した。

尹に代表される主張が世論になり、14年、朴は「虚偽を広めて元慰安婦の名誉を傷つけた」として刑事告訴された。起訴→1審無罪↓2審有罪(罰金110万円)。

92年、尹は運動体の報告文にこう書いた。「北朝鮮は日本の戦争犯罪賠償を確実にさせようとしている。南(韓国)と北が挺身隊(性奴隷)問題の真相究明促進で賠償を受け取る力は整いつつある」

「帝国の慰安婦」の無罪

「帝国の慰安婦」はどんな本か。日本が大日本帝国だった1945年以前、戦地で日本兵を慰安させた植民地・朝鮮(今の韓国と

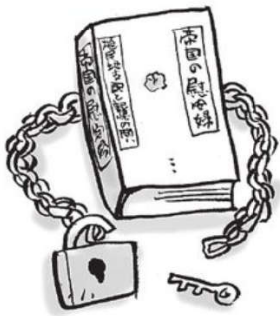
それに對し、日本の保守勢力は「慰安婦は(古今東西、普遍的に存在する)売

春婦」だと反論。中道・リベラル勢力も「性奴隷」説とは距離を置いた。

だが、韓国の活動家は国際人権団体を通じ、慰安婦問題を「戦時の女性への暴力」や「人身売買」と関連づけることに成功。2007年以降、欧米各国の議会が対日批判決議を採択。欧米の諸都市に慰安婦少女像が出現した。日本は国

際情報戦に負けた。朴裕河は日本近代文学の研究者である。「帝国の慰安婦」は13年に韓国で、14年に日本で出版された。著者は、慰安婦は多面的な存在であると考え、「すべて売春婦」という単純化を拒否。戦時の兵士と慰安婦の間には友情や恋愛もあったことを文献で裏付け「性奴隷」説も退けた。

尹が北朝鮮と結びついていたことは疑いが無い。「帝国の慰安婦」の刊行に寄せ、朴は、右にも左にも偏らぬ声が「倫理的、合理的な『第三の声』となつて出会う契機となることを願う」と書いた(あとがきに代えて)。最高裁判決がさらに読者を広げる機会になるといい。(敬称略)



題字・絵 五十嵐晃

20年、尹が革新政党の国会議員に当選すると、運動体内から、尹の助成金横領

毎週月曜日に掲載